

特集：卒業

旅の心得

坂本 和一（筑波大学 生命環境科学研究科）

「先生、お久しぶり。研究うまくいってますか〜？」

平成23年3月9日、卒業研究の発表会会場で、私は4年生のA君からこんな風に声をかけられた。

“A君は、確か実習の単位が足りなかったと思うが、、、進路もなかなか決められなかったし、、、優柔不断なのか、、、そもそも、あまり大学にも姿を見せていなかったはずだ。”

記憶が脳裏をかすめていく。そのA君が、私の研究の心配をしているのだ、、、。

「ああ、まあまあかな」、私はしどろもどろで答えた。



A君の研究発表は素晴らしいものであった。研究の成果や考察はもとより、質問にも適格に答えていた。何よりも発表態度が堂々としていたのだ。記憶の中のA君はおどおどと伏し目がちであったが、壇上のA君は誰が見ても自信に満ちあふれていた。もしタイムマシンがあったら、四年前のA君は今の自分をどんな風に見ただろう。

“すごい研究やってるな〜。難しくて中身は良く分からなかったけど。いつか自分にもこんな発表が出来るんだろうか。”

きっと羨望と尊敬の眼差しで、今の自分を見たに違いない。

しかし、月日は確実に流れていた。四年の時間は、A君の中のもやもやした不安を確実に吹き飛ばしていた。間違いなく成長していたのだ。



「四年間なんてほんの一瞬の旅である」。入学当時のフレセミで、私はクラスを前にこんな事を伝えた。「けれど、一生のうちで最も密度の濃い一瞬でもある」。

今、四年の時を振り返って、みんなはどんな形でそれぞれの「一瞬の旅」を経験したのだろうか。濃くもあり、変化にも富み、感情豊かな時間であったに違いない。ブレーキや舵取りのコツも少しは身についたことだろう。



最も大事な点は、この「一瞬の旅」は、これから先もずっと続いていくということだ。将来にやってみたいこと、過去にやり残していること、きっといろいろあるに違いない。まあ、臆せず、怯まず、気の済むまで旅を続けてみることにしよう。たまには迷うのもいいけれど、躊躇せず一歩踏み出してみることも大事なんだろうな、きっと。でも、せっかくの旅なのだから、感動する気持ちは忘れない方がいいよね。

人の一生なんて、案外「ほんの一瞬の旅」なのかも知れないよ。